Ⅰ　『研究紀要』第 27 巻の刊行によせて

「ねば／べき」思考からの脱皮

教育研究所所長　佐伯　胖

教育研究所に入所した研究員が大きく変わる（変えられる？）ことの一つは、「ねばならぬ／べきである」という「ねば／べき」思考からの脱皮であろう。おそらく、入所する前の教師観では、教師は「○○でなければならない／□□であるべきである」という規範をつねに念頭におき、そこから、子どもの教育についても、子どもは「○○でなければならない／□□であるべきである」という規範意識をもたせる（身につけさせる）ことが教育の中心だとしていたのではないだろうか。

我が国の学校教育は、そもそも「学校」という制度の始まりの時から、国民を「かくあるべき姿」に「教えて、変える」、すなわち「教化」の場とされてきた。したがって、「ねばならぬ／べきである」を抜きに、「教育」を語ることなどできないというのが一般的な「常識」であろう。

ところが、本研究所では、何よりも、子ども一人ひとりがそれぞれその子どもなりに「よく生きようとしている」、「よく育とうとしている」ことに目を向けることが求められる。むしろ、「ねばならぬ／べきである」という観念は、一旦棄てて子どもを見ることが求められるのである。これは、実は、「大変なこと」なのである。研究員はその「大変なこと」を成し遂げるために、自らを振り返り、語り合い、迷い、葛藤していく。

それは、「何もかもがわからなくなる」体験であろう。何をどこから考えたらよいのかがわからず、これまでの「教師としての自覚、自信」がぐらぐらと打ち砕かれるような思いに駆られるのである。そのような経験を積み重ねていくうちに、あるときから、子どもが「よく生きようとしている」、「よく育とうとしている」ことが「見える」ようになってくるのである。これまで「見ていたはずだが見えていなかったこと」が、まさに、勝手に、向こうから、「見えてくる」。

そのとき、「教育」という営みが、「かくあらねばならぬ／かくあるべきである」ということからではなく、「かくあるは、かくあるべくして、かくある」こととして、自然に、「できている」。「教師であって、よかった」という実感も、おのずからわきおこってくる。そのとき、当研究所とはそういうところだったのだ、ということが「わかる」。